紅の狐【上】

ｓｙａｔｏ!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅の狐【上】

【Ｎコード】
Ｎ４７３１Ｍ

【作者名】
ｓｙａｔｏ！

【あらすじ】
過去は過去今は今なんていってお話を終わらせるのが嫌いな作者です。
だから過去に深みを持たせたいし、今を生きる躍動を書きたいんですね。
それに未来への希望を書いたら、ノーベル賞獲れんじゃね。
言うならば、そこまで達したい人間の書く小説です。
あらすじは、主人公が田舎町という箱庭の中で繰り広げるお話です

ね。ハイ。
大体連載ものなんだからあらすじ書くと、読み進める感が無くなるのでもう書きません。
自信ないですけど。
一度読んで、読んで読み干して頂きたい。

『1』

ここは、牛の臭い漂う美朱雀村。

僕はシティボーイなのにこんな田舎は場違いってもんだ。
タクシー内で運転手の白髪オヤジの頭を見つめながら思っていた。
うわぁ絶対ハゲるなこの人。
温水さんになっちゃう。
はてさて何故僕がこんな田舎まで峠を越えてやって来たのかと言うと。
葬式。
だれが死んだかというと。親戚の爺さん。
僕の親が来ればいいってのに、なぁんで僕に任せるんだよ。
しかも一回も顔を見た事無いし。
そして、しばらくの間。約一週間僕はここで過ごすことになる。
まったく普通に葬式すれば良いというのに、爺さんは金持ちらしくて葬式がどーんと大きい葬式になった。
そんな、僕に恨みでもあるのかってぐらいひどい事をしてくれた人の名前は神埼　鐘之丞さんと言う名前らしい。
ひどく、覚えにくい名前だ。
さぁ、見えてきた。僕が約一週間ほど過ごす事になる家。親戚の君島家だ。
サザエさんの玄関みたいなドアを開けると、君島家の大黒柱の妻。
つまり奥さんが出てきた
この人は君島　　香夜さん。見た目は二十代中頃だが、３４歳と魔女のような人だ。
この人はまともな人。

まともじゃないのはこの人。
香夜さんの後ろに突っ立っている、無精髭の中年。
この人は半端ねぇぞ。
本気で。（本気と書いてマジと読む）
この人は大人気が無くて、僕が小さい頃に酷い目に会った気がする。
「くらえぃ！！」
おっさんの爆裂パンチが飛んできた！！
ぐふぅ！！痛ぇ！！くそぉ！！
腹筋が！
割れるかと思った！（それは逆にいいじゃん！）
僕の腹筋を割って満足したのかおっさんは家の奥へ消えてゆく。
口では愛想いいかもしれないけど、腹の中はドス黒いんだからな！
腹を押さえながらおっさんを睨む。
「ごめんなさいね、小次郎さん最近若い人に会って無くて・・」
はしゃいじゃったみたいと香夜さんが言う。
「大丈夫ですよ。」
「言い聞かせてとくから。」
「嫌、大丈夫ですよ。」
「大丈夫じゃないわよ。刻み込んであげなきゃ、あの体に！」
ゾッと寒気がした。

『1』（後書き）

あとがきと言っても雑談なのだけれども。
この小説は、適当とまではいきませんが、スラスラぁ～っと土台（構成）を掻き散らして、一か月ご着色してお話にしたんですけども、どうですかね。
文字の間違い、誤字等があったら。
助言していただきたいなぁ―。
最初はブログに駄々流ししていたんですけど、誰にも見られなくて、泣けてきてこちら様に投稿させていただきました。
これから楽しんでいただけたら幸いです。

『2』

ふかふかの布団。
そして、薄汚れた畳。
うーんすごいミスマッチだな。
掛け軸が掛かっているこのミスマッチな部屋が僕が一週間過ごす君島家の二階だ。
ここが僕の自室になる。
ここでは、布団に寝ることでＨＰが回復する事が出来るとかセーブが出来るとか、そんなＲＰＧ要素は無いのだけれどこの布団で寝たらさぞ気持ちが良いだろう。
それと、この部屋は、もう一人住人が居るんだけれど、とってもうるさいヤツでなんかもう会いたくないと言わざるを得ない。
いや、マジで。
それにしてもこの部屋から観る風景は風情だな。
毎回変わらない風景だ。
でもゆっくりして居られないんだよなぁ、なぜなら明日からもう葬式が始まるのだから。
「ふにゃぁん」
ん？
この軟体動物を表す擬音のような何とも言えない鳴き声を発する猫は、
カルビシアじゃないか。漢字で書くと火流美柴唖。
・・・とゆうのは僕が今作った、しょうもない当て字。
うわぁ・・・僕って厨二病だったのか？
どうせ厨二病なんて、最近のゆとり教育生徒なら通る事。
厨二病なんて言うのだけれど、僕の発病は小学三年だったな。
『必殺！暗黒消炎斬』なんて奇声を発しながら、毛布で作った『敵』

をパンチしていたな。
あーはずかしい。
大体、当たり前にもだけども必殺技の中に『斬』という単語が入っている地点で、パンチはおかしいと思う。
まぁゆとりだよ僕は。
それにしても暇だなぁ。
暇だから、明日の予定を考えることにした。
＜神埼の葬式簡略化攻略チャート＞
起きる→朝ごはん→家出る→葬式→帰る→昼ごはん→もう色々とする→寝る。
こんなところだろう。

・・・ていうか夜までとても暇だ。
ここまでになると、無性に騒ぎたくなるぞ！
んん？騒ぐ？・・だと？
騒ぐとなると入鹿・・？
あのうるさい・・・小娘？
いや小娘では無いな。絶対。
どちらかと言うと・・・おばさん？
それは置いといて、入鹿というのは、前文で書いたとってもうるさいもう一人の住人だ。
君島家の一人娘、君島入鹿。
香夜さんの年齢は３４歳。
入鹿の年齢は１８歳。
年が離れている。
おっさんの連れ子でも無い。

とゆうかおっさんはバツ1じゃない。
裏を返してバツ2でもバツ3でもないのだから。
故に彼女は養子だ。
バツ99でもないよ。
戸籍上の親。
である。
話し相手が欲しいよぅ。
ええい、こうなったら入鹿でいいや。
階段を下り、玄関近くの入鹿の部屋をノックする。
こんこん。
・・・反応なし。
もっかい叩こう。
こんこん。
・・・
こんこんこん！
・・こんこんこんこん！
「狐狐うるさいぞ！どこのドイツだ！？殺してやるぞ！」
いっぱい突っ込みたいけど順を追って突っ込みます。
僕が生きている上で「こんこん」を「狐狐」と表す人間は、高田純次以来二回目の登場である。
「何気なくこの小説のタイトル、紅の狐に合わせて狐という言葉使ってんじゃねーよ。」
なんかわざとらしい限りだ。
それと、ドイツって国名かよ！
あと殺してやるって怖いんだよ！
「久しぶりだなのあ。」
「入っていいのか？」
ドア越しの会話である。
「ちょっと待て・・部屋を片付ける！」
「ああ。」

入鹿の部屋は、汚い。
足の踏み場が無いとか、早く片付けろとか、片付けたって関係無い
そんな物を通り越した異端なる空間なのだ。
「いいぞ。入れ。」
ドアノブに手を掛けた。
覚悟は出来ている。
「のあ殿のおなぁーりぃー」
「うるせぇよ。」
「最近歴史に凝っていて、使ってみたかったんだよ。」
「いつの時代だ？」
「明治時代。」
おなぁーりぃー全然関係ないじゃん！
僕はある異変に気付いた。
部屋が片付いている。
なん・・・・だと・・・・
世界が終ってしまうんじゃないかって言うぐらいありえない事が起こっている。
「おい入鹿、どう片付けたんだ？」
「押し入れに。」
「お前はクレヨンしんちゃんか！」
「何故クレヨンしんちゃんなんだ！？」
教えろと、入鹿は言う。
「お前はあのエピソードを知らんのか？」
みさえが、しんのすけに部屋を片付けろと言い、押し入れに片付けたというエピソードを！
力説した。
「ほほぉう、北斗の拳のひでぶはそうやって生まれたのか！」
「そんなエピソード話してねぇよ！」
逆にそのエピソードが知りたい。
「話を戻すぞ！」

「ああ分かった、今から部屋を片付ける。ちょっと待て・・」
「おい、戻りすぎだ！」
俺が戻したかったのは、お前はクレヨンしんちゃんか！と突っ込んだ前のテーマまでだ。
つまり、押し入れに。からである。
「押し入れ・・開けるぞ。」
「あ・・開けちゃダメだ！のあ大佐！」
「どこの映画だよ！」
「それは開けてはいけないパンドラの箱なんだ！」
「付き合ってられん開けるぞ。」
がばっ。
どどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどど
どどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどど
どどどどどどどどどどどどどどどどどどどど
８０文字も使うほど物があふれ落ちていた。
これはもうクレヨンしんちゃんを超えている。
本当にパンドラの箱だったんだな。
「・・・」
「黙ってんなよ」
「すいません」
こういう時だけ気持ち小さくなりやがって。
「で、何の様だったんだ？」
まったく切り替えの早い女だ。
「暇だったから遊びに来たんだよ、お前の親父さんは苦手だからな」
「そうか・・・小次郎が苦手なのか・・」
「おい、ちょっと待てよ親父の事呼び捨てかよ！」
「最近ではそういう家庭も増えてるんだからな、」
それに、私は養子だからと言ってのける。
あっちはネタで言ってるつもりでも、こっちはシリアスな気分になっちまうんだよ。

「のあ、私の友達に北斗の拳の表紙を見ただけで、何巻か分かる小学生がいるんだが」
「なんかさ、北斗ネタが多いな！それとさ小学生でそこまで北斗マニアな奴いるのが不思議だ！」
「ちなみにその兄は、北斗七死闘氣断を放つ事が出来るぞ。」
「なんで映画オリジナルの超大技を！」
というかマニアックすぎるネタじゃないか。
映画なんて。
「映画なんて嫌いだ！」
「どうしたんだ！のあ！」
「うお～～～！」
心の声が出てしまった。
というか、コイツの友人関係はこんなやつばっかりなのか？
すっげぇマニアック。
その後もぞろぞろと話し続けたのだけれど、それは大長編紅の狐でお話しすることにしよう。

そんなの無いけどね。

『2』（後書き）

大長編紅の狐てどんなんやろうな～

『3』

おっと今何時だろうか？
・・・もう４時じゃないか。
最悪だ。

これまでの経緯はを話すとすればそれは、入鹿との話の後からだろう。

耳にタコが出来るぐらい聞き、口が裂けるぐらい話した後、外は暗く寝る時間だった。
明日は４時起きだから早く寝なくちゃならない。
寝る予定の１１時まで１時間あるから歯磨きをして風呂に入った。
そして何を思ったか入鹿が僕の部屋にやってきて、
「朝まで生テレビ風トーク番組するぞ！」
と言いだしやがったからである。
少しだけなら付き会ってやってもいいかなと僕は思った。
大体、あんなに喋り通した入鹿はすぐ眠くなるだろうと思ったのが終わりの始まりだった。
追加コース入りました。
これも大長編紅の狐に収録される予定だ（嘘）

そんな説明をしているうちに時間は経ち時計の針が指すは午前６時。
おかげで寝不足だ。
眼の下のクマが気になるが、仕方ない着替えよう。

「おい入鹿！着替えるから出ていけ！」
今現在、入鹿は、『掃除とは何か。ｖｅｒ２．５７』という話をしていた。

ｖｅｒ２．５７って何？しょうもねぇ・・・
「分かった。」

朝七時。
あっさ飯、あっさ飯、楽しいな。
あー死んじまう位テンションがヤバイ。
異常だ。
おっさんがやって来た。
「おぉ坊主、死にそうな顔してんな。」
オマエノ娘ダヨ。
それ言う気が起きない。
疲れている。
だが、窓から流れ込む光で何とか保っている。
畳が良い匂い。
・・・
すごい眠たい。
「坊主、俺は中パンチ、しゃがみ蹴り波動拳から昇竜拳に移行そして、ＥＸ波動拳のコンボを出来るのだが。」
「えぇ！」
入鹿といいおっさんといい、この一家は何なんだ！？
家系をたどったらなんかすごいのに辿り着くんじゃないの？
君島源流崔みたいな？
目が覚めた。
「そんな驚くなゲームだからさ。」
あぁゲームかそうか良かった良かった。
今度もしガチ喧嘩仕掛けられたら死んでしまうかと思った。
「というか小次郎さんゲームやる人だったんですか・・・」
「ゼノサーガ。」
「面白いですよね、ゼノサーガ。」
「２」

「２！？クソゲーオブザイヤー２００４の大賞じゃないか！？」
よくもあんなものを・・・
シリアスな場面を壊す、あのゲーム・・・
１が面白かったのにさぁ・・・
「ローグギャラクシー、ファンタシースターユニバース、」
「ぎゃ～それ以上言わないでくぁせｊふじｋｆｄこｊ！」
てゆうかクソゲーオブザイヤーシリーズ全プレイかよ。
「四八（仮）、メジャーＷｉｉ　、せ・・」
「ぎゃあああああっやめろこのクソヒゲ！」
「さ　ぁ　、　ふ　る　え　る　が　い　い　」

『3』（後書き）

今年のオブザイヤーはなんだろなと思って書いてました。

『4』

はてさて、場所は変わって、この葬式の主役。神崎　鐘之丞の自宅。
神崎というのは、今日。呆気無く燃やされてしまう、爺の事だ。
神崎家は神道の為、神社ではなく自宅が斎場となっている。
たしか神道って天照大御神を崇拝してるんだっけ？
よく分からん。

午前の部。
蝋燭の火を見ていると何かが不安定になっていって、どんどん吸い込まれていく。
いかん、ヤバい方向へ意識が向いてしまった。
葬式は静かに進む。
こんなに静かだと逆に疲れる。
ん？
謎の視線が、僕に送られてくる。
ハンドサインで、ｅｙｅ言語で話せの合図だ。
ｅｙｅ言語というのは超大昔、僕と入鹿とで開発した、新時代の幕開けを呼ぶ言語。
目で会話する言葉。
だからｅｙｅ言語。
といっても開発途中で『母音』と『ん』しか使えない。
いいあいあん（意味無いじゃん）
あーどうでもいいから無視だ。

午後の部。
午後になると、多くの人々が花を手向けに来る。

それを僕は、神崎家の縁側で観ている。
ほんの３０分前ぐらいに、クレーンがやって来てどんと石碑を立てていった。
刻まれた文字を読むと、『美朱雀村を救った天才医師。神崎　鐘之介　ここに眠る』
恥ずかしく掲げられているが、神崎　鐘之介という人間は、なかなかの技術を持った医師だったぽい。
詳しくは知らないが、何十年も前に此処を襲った大火事の時大役を果たしたそうだ。

「うぇいうぇいうぇ～～～い！」
！？
「なんで私のハンドサインに応じなかったのだ！」
「なんか用あったのかよ？」
「超大事。」
「で、その超大事な用は何だ？」
「これを、神凪に渡してくれ。」
そう言い渡してきたのは小汚い御守りだった。
うわぁ汚ねぇ。
「なんで僕が・・」
「うるさいな、別にいいじゃないか。罰としてのあには、葉琴音神社に行ってもらう。」
「何の罰だ！」
「葬式中に静かすぎて疲れちまうぜぎゃふんぎゃふんどぅわーはっはＨＡ！みたいな事を考えていた事に対しての罰だ。」
・・・図星だ。図星だけど、
「ぎゃふんぎゃふんどぅわーはっはＨＡ！までは考えてなかったぞ、僕は！」
まぁいいか。
「いいよ行ってやるよ。」

「おぉ良い子だ。小さい頃教育した甲斐があった。」
「僕はお前に教育された覚えが無いぞ！」
「じゃあ、協力？」
「協力された、覚えもないぞ！？」
「じゃあ強化合宿か！」
「ねーよ！」
まったく、高校時代空手、剣道、陸上を掛け持ちしていた女とは思えないな・・・
神凪という人は今行こうとしている、葉琴音神社の巫女。
入鹿の古い友人。そんでもって現在入鹿と同じ年で大学生（ちなみに入鹿は大学へ行ってない）。
のはず。
「分かったよ。葉琴音神社か。分かったよ行ってくる」
「おお、行ってくれるか！ついでに、御参りもしておけ。なんたって意味の分からないのが奉ってあるんだから！」
「意味の分からない神に祈りたくねぇよ、疫病神だったらどうすんだ」
あと、貧乏神だったらどうすんだ。

『4』（後書き）

なんで入鹿が大学に行っていないかと言うと、彼女は旅に出ているからです。
どんな旅かは・・・いつか書きます。
構成は出来てるんですけどねw

『5＋6』

やって参りました、葉琴音神社。
早く神凪さんに御守りを渡して帰らないと。
僕は、昼過ぎの神社で神凪さんの名を呼んだ。
「神凪さーん、どこにいますか？」
そう聞くと、すぐに問いが返って来た。
「はーい」
やはり、何年か昔に会ったときと同じ、おっとりとした声だ。
聞きとるのが疲れる・・・
「何処にいらっしゃいますかー」
「本殿に居ます～」
その声を聞き、僕は本殿に向かった。
燈籠がたくさんあり、木は茂って結構きれいな風景だと思った。
このうるさい蝉が鳴いてなければの話だけど。

・6・

本殿前に着くと、神凪さんが居た。違うな、やって来たと言うべきか。
竹箒で掃除をしている。
だがしかし、巫女さんの姿では無く、ポップな死神のマークが刻まれたジャージだった。
超残念。
ドンマイ僕。
やっぱりさ、巫女さんってのはレッドとホワイトのアレを着ないと

いけない法律にしなくちゃいけないと思うんだ。
とゆうか、神聖な場所で死を象徴する神の服を着てよいのだろうか？
でも死という物以外も象徴しているという事を聞いた事があるがそれは置いといて。
「はて、あなたは誰ですかぁ？」
「どうも、君島　入鹿の親戚の霧志乃　のあです」
ぺこりと、淡々と、お辞儀を僕はした。
「ああ、のあさん。入鹿ちゃんから話は聞いてるわよぉイイ子だって」
はぁ。なんかふわふわした口調で心を読みにくい人だなぁ。
「今日はこのお守りを渡しにこの葉琴音神社まで来ました」
そう言って、入鹿の野郎に渡された小汚いお守りを渡した。
「まぁ！これは懐かしい物を～」
この物体、いや。この懐かしい物体とやらが何か気になったから聞いてみる事にした。
「これは一体何ですか？懐かしいものと言いますと？」
「女の子の秘密は教えられませんよ～」
んんん、教えてくれないのか。
軽くあしらわれた。
ちょっと葬式行くの面倒だし入鹿に言われた通りお祈りでもしていくか。
「あの。御参りして行きたいんですけど、何処ですかね？」
「ああ、それならこっちです～」
神凪さんが指を差したのは、神社の奥の方だった。
「どうもありがとうございます。」
「でもお参りしない方がいいですよ。」
「なんで？」
「意味の分からないモノが祀ってありますから。」
えぇ知らないの？神社の巫女さんが？
「行くなよ馬鹿！この野郎殺すぞとは言いませんが、お勧めしませ

んよ怖いですから。」
おい、こえぇよ神凪さん。
香夜さんと同じ威圧感。
「では、失礼。」
とことこと。ばたばたと。わさわさと?行ってしまった。
よしいくぞ。
・・・・吉幾三氏を思い出したのは僕だけか?

『5＋6』（後書き）

巫女さんはレッドとホワイトのアレを着ないといけない法律にしなくちゃいけないんだよばかやろぉおおお！

『7＋8』

僕はこのうっそうと木が生い茂って蝉がうぇーいって鳴いている山道を歩いている。
目指すは、葉琴音神社の最深で御参りをする事。
なんかもう、一人で此処を歩いていると鬱になる。
ダンジョン歩いてるみたい。

登って十分と言ったところか。やっと着いた。
往復ニ十分という事を考えるとまたまた鬱になってしまう。
僕はこのまま鬱病になってしまう的な感じだった。
まあ。御参りするか。
・手水ばちの上の柄杓（ひしゃく）を取って、右手に持ち水をくみ、左手にそそぐ
・左手に柄杓を持ち替え、右手にそそぐ
・また右手に柄杓を持ち、汲んだ水を左手に受けて水を口に含みすすぐ
・もう一度左手を洗い、柄杓を置く
といった感じで、手水を済ます。
次は参拝。
・二拝・二拍手・一拝
・まず衣服、姿勢を正したのち
・二度おじぎをし
・そして二つ手を打つ
・心の中で神様にお願いごとをしたり、御礼を言ったりして
・そうしてもう一度おじぎをして終わる
と言う手順で参拝を済ませた。

なんか、コピペっていいね。

【8】

さてと、帰るとするか。もう暗くなって来て、来なきゃよかったというのは、内緒と言う事で。

山道の階段を、降りようとした時。一匹の赤いキツネが居た。正直可愛い。

野生の狐は珍しい。

「おいで。きつね～」

なにも反応なし。

「なぁ君どこから来たんだ？」

反応はなし。

「名前は何だいきつね君。いやきつねちゃんだったかな？」

皆無。

うわぁ、何か僕動物と話しちゃってるよ。完全にどうかしてるよ。

さて帰ろうか。

僕が階段を再び降りようとした時。

人の。狐の声が聞こえてきた。

「待て。動くな。喰われたいか？」

！？

ヤバい。嘘のようなホントに様な事だ。動物がしゃべっている。

禁断症状だ。

本当に僕はどうかしてしまった。

妄想を具現化する力を手に入れてしまったのか？

しかも僕はドMか？この妄想のセリフが「喰われたいか？」だぞ。

内なるMが目覚めてしまったようだ。

「喰われたいのか？」

「い、いやぁ？喰われたくないけどさ・・・」

妄想だよな。
僕がラリッててもいいから、妄想であってほしい。
「も、妄想ですよねぇ、キツネ君、キツネちゃん？」
「妄想？何だそれは？現実だぞ。ここまで間の抜けた人間を見るのは何年振りだろうか」
はぁ。どうしようどうしよう。
「そうだ、お前に似た間の抜けた人間に小次郎という男がいたな」
「小次郎？君島　小次郎の事ですか？」
「知っているのか。あの腐れ坊主を。」
坊主・・・？
ＰＩＰＩＰＩ☆！！
携帯が鳴った。マジでビビった。入鹿だった。
「入鹿ぁ！てめぇ僕の寿命縮める気か？」
だが、そんな事よりキツネが喋ってると言った。
「はぁ？赤いキツネが喋ってる？本当か？よぉし！！テレビとかいろいろ出して大儲けするために、捕獲して帰って来い！儲けた金の二十％はくれてやるから。じゃあな」
ツーツーと音が鳴った。
切りやがった。
結局金か。こんななんか意味不明で、へんな状態に陥った僕にそんな言葉をぶつけられると、なんかもう誰も信じれなくなるな。
ていうか、このキツネ君を連れて帰らないとボッコンボッコンのボッコボコにされるから連れて帰ることを試みるか。
現に金が欲しいし。
交渉開始！
「ねぇキツネ君。君に来て欲しいとこがあるんだ。いいかな？」
「嫌だな。」
交渉決裂！
たった５秒の掛け合いだった。
ですよね。ならば。

「稲荷寿司をあげるからさ」
狐といったらこれでしょ？
はいそこ笑わない。先生しまいには怒るよ。
「何個だ？」
おぉうまくいった。
「何個でもやるよ。」
財布いくら入ってたっけ。スーパーで買ってこなきゃな。
「ついて行ってやろう」

ぴろぴろりーん★
キツネがなかまになった▼

マジかよこんなのでありなの？

『7＋8』（後書き）

ようやく狐登場！
やっとタイトルどおりになった！

『9＋10』

僕は君島家の家の前に、喋る狐と一緒に突っ立っている。
なんともシュールな絵だ。
もう周りは暗くなってきた。
というか、突っ立っていないで早く家に入れば良いのだがあいにく鍵が開いていない。
今はまだ葬儀の途中。
宴会でもやってるんだろうな。
お味噌汁飲みたい。
近況報告。さっき電話がかかって来た。
確かこんなやり取り。
「なんだ？入鹿？」
「金儲けの為だからな、パパとママに知られちゃひとたまりもないからな」
「知られてもいいんじゃないか？渡せば親孝行になるだろう」
「金は丸々欲しいんだ。夢があってな。その夢とは・・・」
「言わなくていい、入鹿の夢を知ったとこで僕が何すればいい？」
「手を上げて金をゆっくり渡せ。」
「うるせぇ！入鹿お前は金の亡者か？キレるぞ、切るぞ、電話を切るぞ！嫌でも切るぞ！」
携帯のＰＷＲボタン（電源切る時に押しっぱするやつ）を連打しまくった。
予想通り、ケータイの壁紙が映されている。
「このッ！このッ！消えろこの野郎！筋肉旅烏が！」
そんでもって現在に至ります。

「稲荷鮨をよこせ」

あぁーうるさいな
耳が破裂する前に、もう買いに行くか。
でもどこだっけ？
どこだっけじゃないな、どこにあるか分からない。
うぅん解せぬ。
こんな時は携帯のＧＰＳ機能を使うのが常識ってもんだ。
ぽちっと検索・・・してみたが美朱雀村は田舎という事を踏まえようか。
そう結果は、出てこない。
まぁそりゃあそうだ。こんな田舎まで。某グーグルの測定者が来る筈が皆無だ。
あぁもうやってらんねぇよ。
まあ、歩きましょうか。
歩けば棒に当たる、それは確かな事だ・・・いや、ねぇよどんな不注意だよ。
「目指すは寿司屋だぁ！」
おい狐。シカトかよ。
「おい小僧。」
「何だ狐。」
「私の名前は狐ではない。狐の容姿をしているからそんな名で呼ぶのは分かるがな。」
「だったら。きつねちゃん？」
「まず、稲荷寿司を喰う前に、お前を喰らい尽くそうか？」
「やめておきます。」
「では、寿司屋に向かおうか。」
「分かったよ。」
こいつが名前を名乗ればいい話を・・・
「こっちだ。」
「は？何が？」
「稲荷寿司の置いてある店だ。」

嗅覚が物凄いな狐さん。
ぽこぽこと。とことこと、歩く僕らが向かっているのは。『いかがわしくない』クラブのネオンサインが連なっている通りだ。
そして、着いたのは。
寿司処黄泉。
よみって。
なんか嫌なふいんき。雰囲気だなぁ。
「ここの稲荷を買え。」
「え？高いんじゃ。」
仕方なく店の中に入ってみる。
さぁ。お値段、ｈｏｗｍａｔｃｈ！？
価格が破格だった。
一皿（二個じゃなくて一個）五百円て何？そんなにおいしいの？
ばかじゃないの？
狐のくせにこれ食うの？生意気だな。贅沢しすぎだっつの。
「あ～いらっしゃい」
店の奥から誰か来たようだ。
・・・小次郎だった。
「あの・・・小次郎さん寿司屋でしたっけ・・・」
「お前さん、小次郎を知ってるのかい？」
「知ってますけど、ではあなたは？」
「ああ俺か？俺は小次郎の兄の五作だ。」
どうりで似ているはずだ。
「小次郎を知っているのかい？」
「はい。霧志乃と言います。」
「おお。もうしかしてのあ君かい？」
「はい、そうですのあです」
「おぉやっぱりそうだったか」
・・本当に小次郎の様な声だ、だがなんかこう、殴るぞ糞ジジィみたいな嫌な感情は湧かない。

このお人が本当に小次郎だったなら、僕の頭の中で粉じん爆発が起きるぞ。
粉じん爆発って何だよ！って突っ込んでみたかった。
「ご注文は何だい？」
分かったよ頼めばいいんだろ狐くん！
というか狐がいない多分外だろう。逃げやがって。
「稲荷ずし、一つ」
「五つじゃ！」
！？
「誰か他に居るのかい？のあ君」
「あ、その」
狐でぇすなんて言いたくない。絶対に言いたくない。
「と、友達です」
「ふぅん友達ねぇ、この前の年末にこっち来た時に作ったのかな？」
「あ、はぁい」
声が裏返ってはぁいとか言っちゃったよ僕。「少し女声できもぉい」って研究会のヤツに言われてちょっと気にしてたのに。
思わぬ声だった。
「五個か。何なら十個にしてあげようか？」
「おぉ！」
歓喜の狐。
「でもお金そんなにないですよ僕」
「親戚という事でおまけでタダにしてあげるよ」
「ど、どうも」
よかった、本当に小次郎じゃない。本当に、小次郎の兄の五作の様だ。
でも今まで会った事が無いというのは不思議だ、まぁ偶然が偶然を呼びそれまた偶然を呼んだという事で心の奥深くにしまっておこう。
心の底から猫を被ったスマイルを振りまき、まきまき。さようなら。
そして店の外に退散していた狐にほらよと言ってぶっきらぼうに稲

荷ずしを渡す。
ふと携帯に目を通したらメールが来ていた。なんでも家に着いたから、金狐を持ってきてくれとの事だった。

１０

霧志乃の坊主が帰った後、鮨処黄泉の店内で君島一郎、小次郎は呟いた。
「今年初めて嘘をついちまった」
小次郎は、冷汗と動揺を隠し切れていなかった。
誕生日に娘に貰った壊れそうな時計を見た。カレンダー機能を開いた、月と年を確認した。
「あれから、三十年・・マジかよ」
そう、今年の今はキツネと出会ってから三十年の夏だった。

紅の狐【上】終わり

『9＋10』（後書き）

【上】が終わりました。
どうですか面白くなかったですよね。
でも面白いと言ってくださるのは一向にかまいません。
ありがたく良い方向に受け取っておきます↑評価されると思ってるw

物語が急展開を見せます。
まるでビルから飛び降りるような速さで。

あとがき

@がき

まともにあとがきを書きます。
僕が最初に書いた小説は観るに無残で懺悔しなくちゃいけないくらいの物を世界に生みだしちゃったんですけど、それよりはまぁ、私利私欲より他人行儀になったと思います（使い方間違ってる）。
他人から見て、理解できるのか？
マジそこ大事。
テストに出ると思う。
作文問題とか。
例えばその作文問題なんですけど、自分が必死に書いたところで、その問題に沿った答えを書いたつもりでも、つもりであるがために話が脱線して筋が通っていない文になってしまうのです。
自分がこんな大口叩ける立場じゃないのは十分ここ得ているんですけどまぁ、日本には表現の自由があるんですから仕方ない事だと思いますw
言うならば、文を書くときナルシストになるなって事です。
自分の文に酔いしれて「良い文が書けた！おしまい。」なんて事やったらテストは減点に絶対になると思います。
これはテストじゃなくて小説にも言えます。
書いていて、気付かない誤字等、比喩表現の間違い。最初に季節が真夏って言ったのにスズ虫が鳴いてたり。そんなん間違う訳ねぇよと思う人こそ矛盾は絶対あると思います。
実際に僕もそうですw
スンマセェン！
まぁナルシニズムが悪いと言ってるわけじゃないんですよ、だって少しぐらいは自分の文に酔いしれてないと何というか、こう、前に

出て行こうとはしないと思うんですよね、だからそこはきっちりメリハリがないとだめだと思うんですよねぇ。
ナルシとそうでないのと。
まぁこんな掴めそうで掴めないウナギの様な変な話をしたところで何の得にならない人もいるでしょうし次に行きますよ。
もしもウナギをつかみ得になったとしても、それは電気ウナギで、罠ってこともあります。
なんというんでしょうか、人の意見を鵜呑みにしない方がいい、だって人間正しくないんだものね。
さて今度こそ次に行きましょう。

この紅の狐というのはですね、よく友人に宮崎駿さんの紅の豚のパクリだろって言われるんです。
まぁ仕方ないですけどね。
でも、多分飛行機という単語すら出てきていないと思いますよ。
まぁ読んでくださってありがとうございます。
こういうのは最初に書くべきなんだろうけども。
狐ってかわいいですよね、でも怖いっすよね。
狐で連想される事と言えば、九尾の狐とか、狐憑きとか、オサキとかね。
霊的なものが多いんですよね。だから、こういう作品を作ろうって時に最初に出てきたのが『霊』を直線的に表現できる狐になったんですね。
他の動物も使いたいんですけど、土台が必要ですもん。
狐が根っこ、他が葉っぱみたいなね。
まぁ【上】で飽きるのもよし、そのうち出す【下】を見るのも良しまぁどうと言うように好きにしてください。

おてぃまい。

あとがき（後書き）

あとがきのあとがきになるんですけど、どうでした？
くだらない話。
本篇の話よりもくだらない話の方が長いって言うねw
まぁものすごい眠いんで寝ます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4731m/

紅の狐【上】

2010年10月8日23時26分発行